台大日本語文研究第 23 期
2012 年 6 月，頁 1-24
2012-03-27 收稿，2012-05-20 通過刊登

# 日本平安時代物語文學中的求婚變奏曲
## ——關於掠奪女性身體自由的「搶婚」譚——

賴振南*

## 摘要

根據個人多年來對於日本平安時代的物語文學的考察及研究，發現《竹取物語》之所以可稱爲「物語之祖」，是因爲《竹取物語》所蘊含的「物語要素」都影響了日本平安時代的其他物語文學作品。

其中，《竹取物語》中五位人稱「好色之輩」的公卿王侯就展開「憧憬年輕貌美的異性」、「想好好看清對方」或「有意佔爲已有」等求婚行爲，最後天皇也加入求婚行列，甚至演變成帝王搶婚的變奏曲。《竹取物語》之後的物語作品，也都幾乎圍繞在男女求婚、戀愛及結婚等兒女私情方面的描寫。若把「搶婚」這種求婚變奏曲的創作手法特別抽離，放諸平安時代的物語文學作品加以審視，結果是否可以發現物語的另一「物語要素」，是值得探討的重要課題。因爲《竹取物語》、《伊勢物語》、《宇津保物語》、《落窪物語》甚至《源氏物語》等物語文學經典中都一脈相承了「搶婚」的情節。透個此論文發表，一一檢視並分析作品中的實例，再分項歸納用例在作品內的內涵，如此逐步從物語文學中的求婚變奏曲的文藝現象中，探究它身爲「物語要素」的重要性並申論其文藝創意性。

關鍵詞：求婚、變奏曲、戀愛、物語文學、物語要素

* 輔仁大學外語學院日本語文學系教授兼系主任

# Variations on Proposal of Marriage in Monogatari Literature of the Heian Period of Japan: Tales on Marriage by Abduction in Deprivation of Freedom in Female Bodies

Lai, Chen-nan*

## Abstract

According to the author's dedication to the research of Monogatari Literature in the Heian Period, he has discovered that Taketorimonogatari (竹取物語 The Tale of the Bamboo Cutter) is deemed to be the oldest extant Monogatari Literature because it contains story elements that influence other literary works in the Heian Period in Japan.

The five lustful princes in Taketorimonogatari applies "eager for youth and beauty", "hope to take a closer look at each other" as means of proposing, in the end also the emperor joins the proposal of marriage. Literary works after Taketorimonogatari also take up the theme of men proposing to women, love affair and marriage and other children. It is worthwhile to explore if variations in "marriage by abduction" , can be commonly found in Monogatari Literature; thus discover another characteristics of Monogatari Literature. As witnessed in Taketorimonogatari, Ise Monogatari (伊勢物語 The Tales of Ise), Utsubo Monogatari (宇津保物語 The Tale of the Hollow Tree), Ochikubo Monogatari (落窪物語 The Tale of Ochikubo) or even Genji Monogatari (源氏物語 The Tale of Genji) and other literary classics, "marriage by abduction" is always part of the plot. This research project aims at viewing and analyzing

* Professor, and Chair of Department of Japanese at Fu Jen Catholic University, Taiwan

examples of work one by one, and then categorizing examples in the works as listed above in the hope to explore the artistic creativity and importance of “marriage of abduction” as one of the characteristics of Monogatari Literature.

Keywords: Proposal of Marriage, Variations, Love, Monogatari Literature, Tale elements

# 日本平安時代物語文学における求婚の変奏曲
## ―女性の身体の自由を奪う「略奪婚」譚について―

賴振南*

## 要旨

これまで筆者は、長年にわたり、平安時代の物語文学への考察と研究を行ない、『竹取物語』が「物語の祖」と称することができるのは、『竹取物語』に含まれる「物語の要素」が平安時代の他の物語文学作品に影響しているためだと気付くに至った。

この中で、『竹取物語』における五人の「好色の輩」と称される王族や貴族は「若く美しい異性に憧れ」、「相手をもっとよく見つめたいと思い」、あるいは「相手を自分のものにしようとする」などの求婚の行為が見られ、ついには作者が帝を５人の公達が求婚に失敗した後に登場させ、また帝にもかぐや姫に求婚させ、さらに略奪婚の描写へと繰り広げられる。『竹取物語』の後の物語作品も、ほとんどが男女の求婚、恋愛、結婚などの恋愛をめぐってなされれている。もし、「略奪婚」という求婚のバリエーションの創作手法を特に取り出し、平安時代の物語文学作品に対象を広げてみれば、物語のもう一つの「物語的要素」を見つけ出せ、興味深い問題となるのではないだろうか。というのは『竹取物語』、『伊勢物語』、『宇津保物語』、『落窪物語』、『源氏物語』などの物語文学の経典にはいずれも「略奪婚」のエピソードが貫かれているからである。この論文発表を通じ、作品における例を見つけ出し、さらに作品に描かれた内面をまとめたい。これによって、物語文学における求婚のバリエーション

* 輔仁大学外国語学部日本語文学科教授兼学科主任

という文芸現象から、それが「物語要素」となる重要性とその創意性を探っていきたい。

キーワード：求婚、変奏曲、恋愛、物語文学、物語要素

# 日本平安時代物語文学における求婚の変奏曲
## —女性の身体の自由を奪う「略奪婚」譚について—

賴振南

## 一、はじめに

これまで筆者は、長年にわたり、平安時代の物語文学の考察・研究を行ってきたが、『竹取物語』[1]が「物語の祖」と称されるのは、『竹取物語』に含まれる「物語素」[2]が平安時代の他の物語文学作品に影響しているためだと気付くに至った。例えば、『竹取物語』に含まれる、「平安朝の風俗の反映を基礎に、物語の主題的な表現方法として、作中人物たちの心情表出の効果を高めて」[3]いる「物語歌」、また「たんなる多淫ではなく、そのための芸の道が思想や美学を形成」[4]する「色好み」やかぐや姫の「貴種流離譚」、五人の貴公子の「求婚譚」などは物語文学に欠かせない構造要素あるいは創作手法であろう。

このうち、「色好み」に注目してみると、『竹取物語』では五人の「色好み」と称される王族や貴族が「若く美しい異性に憧れ」、「相手をもっとよく見つめたいと思い」、あるいは「相手を自分のものにしようとする」求婚行為を行う。そしてついには、五人の公達者が求婚に失敗した後に帝が登場してかぐや姫に求婚し、略奪婚を試みる。このように『竹取物語』で展開された同心円状の求婚・恋愛を

---

1 野口元大 校注『竹取物語』(新潮日本古典集成 26、新潮社、1979.5)

2 川崎寿彦「物語素」(『文芸用語の基礎知識 '85 四訂増補版』国文学解釈と鑑賞 4 月臨時増刊号、志文堂、1985.4) p.704 上
原義はナラティフ(物語)の最小単元の意。構造主義言語学以降の言語学界の状況と、オリサ・フォルマリスムの再評価の機運に乗って、音韻論的方法を文学批評に応用しようとする意識が強まってきた。(略) 物語の構造単元を整理して、作品の物語としての成立に必要不可欠な出来事と、そうでない付随的出来事との二つに分類し、前者を物語素と呼ぶ。

3 高橋亨「物語歌」(『国文学 解釈と教材の研究』「特集 物語—物語論の新しい〈課題〉集」、第 35 巻 1 号、1991 年 1 月号、学燈社) p.93 下

4 高橋亨「いろごのみ」(『国文学 解釈と教材の研究』「古典文学のキーワード」、第 30 巻 10 号、1985 年 9 月号、学燈社) p.51 中

めぐる物語構造は、その後の物語作品のほとんどに影響し、受け継がれていると言ってよい。ゆえに、「略奪婚」という求婚のバリエーションを創作手法として特に取り出し、平安時代の物語文学作品を見渡してみれば、物語の「物語素」をめぐる、興味深い問題となるのではないだろうか。というのは、平安文芸においては、平安朝初期の『竹取物語』から末期の『堤中納言物語』に至るまで、男性が女性の身体の自由を無理やりに奪おうとする「略（掠）奪婚」エピソードが平安文学の流れを貫いて存在するからである。

そもそも日本の略奪婚は、『古事記』「大国主神（おおくにぬしのみこと）」の段[5]からその例を確認することができる。

> 於是、其妻須世理毘売者、持二喪具一而哭来、其父大神者、思二已死訖一、出二立其野一。爾、持二其矢一以奉之時、率二入家一而、喚二入八田間大室一而、令レ取二其頭之虱。（略）其大神、以下為咋二被呉公一唾出上而、於二心思一レ愛而、寝。爾、握二其神之髪一、其室毎レ椽結著而、五百引石取二塞其室戸一。負二其妻須世理毘売一、即取二持其大神之生大刀与生弓矢、及其天沼琴一而、逃出……（下線は筆者）
>
> （さて、大穴牟遅神（おおあなむじのかみ）の妻の須世理毘売（すせりびめ）が喪の用具を持って泣きながらやってきたので、その父の大神（おおかみ）は大穴牟遅神がすでに死んでしまったことと思い、その野に出て立った。そこへ、大穴牟遅神が例の矢を持って差し上げたところ、須佐之男大神（すさのおのおおかみ）は大穴牟遅神を家に連れて入り、多くの田ほどの広い室に呼び入れて頭の虱を取らせた。（略）大神は百足を噛み砕き吐き出しているものと思い、心の中でいとしく思って寝た。そこで、大穴牟遅神はその大神の髪を手に取って、その室に椽ごとに結びつけて、五百人かかってやっと引けるほどの巨大な岩でその室の入り口をとり塞ぎ、その妻須世理毘売を背負い、すぐにその

[5] 山口佳紀・神野志隆光／校注・訳『古事記』（新編日本古典文学全集 1 、小学館、1997.6）原文：p.82　現代語訳：p.83

大神の生大刀（いくたち）と生弓矢（いくゆみや）と、天（あめ）の沼琴（ぬこと）とを取って持ってにげだした……（下線は筆者）

と、大穴牟遅神（大国主神）は、根の国の須佐之男大神のもとで成年式儀礼を終え、呪術師・祭司王としての資格を認められ、さらに須佐之男大神の娘を盗み出した同時に、三つの神宝をたずさえて逃げ出し、地上の国葦原中国（あしはらのなかつくに）に帰ってくる。この話について西村亨は『王朝恋詞の研究』[6]で次のように解釈している。

古代の結婚には、常にその宗教的な意義がまつわっているが、この場合も、すせりひめはすさのをを祀る巫女としての性格を持っている。神に仕える巫女を奪うことはその神の信仰を左右することである。すせりひめとともに大刀・弓矢・琴を盗んだことは、神を祀る巫女とともに宗教的な威力の象徴である神宝をわがものとしたことで、すさのをの威力が継承したことになる。女を盗むことの宗教的な意義がこの話には明らかに示されている。（下線は著者）

西村亨はまた別稿[7]でこの「巫女を奪う」ことの宗教的な意義を「色好み」の意義に関連させて次のように指摘している。

折口信夫の言うところのいろごのみの起源は、遠く大和宮廷成立以前の古代にまで遡る。（略）偉大な君主とは多くの地方の高巫に求婚し、それらを妻として一身に保ってゆく能力を保持するものを意味することになる。大国主命や景行天皇・仁徳天皇・雄略天皇などに多くのつままぎの物語が語られるのは右の理由からあり、またそれらの神や帝王は多くの妻たちをそれぞれにふさわしく処遇して、円満な愛の生活を遂げねばならなかった。

以上の用例と西村亨の解釈によれば、大国主神の物語の中心は成年式儀礼＝貴種流離譚と祭祀権（祭り事＝政治）獲得に置かれてい

6 西村亨『新考　王朝恋詞の研究』（桜楓社、1981.7 再版発行）p.64 上
7 西村亨「『いろごのみの』とは何か　折口名彙としての『いろごのみの』」（『日本の美学　特集―色』5、ぺりかん社、1985.7）p.93 上

ることが分かる。女を盗み出すことは宗教的な威力に加担する効用に止まっているほか、男女の求婚、恋愛などの描写は大穴牟遅神が須佐之男大神の根堅州国（ねのかたすくに）に到着したところ、「其女須世理毘売出見、為二目合一而、相婚」[8]のほか、何も触れていない。むしろ、須世理毘売は男が女を盗み出す助役で、親から離れて夫の家や夫のいる場所に移り住む「嫁入り婚」の元祖の役割が大きいのではないか。記紀神話時代の女性はまだ須世理毘売のように男と直接会うことができる、身体＝性＝結婚の自由を与えられた存在であった。求婚の変奏曲としての「略奪婚」が物語の創作要素になるのは、物語という、平安時代の新しいジャンルの登場を俟たなければならないのである。男が女を盗む、拉致して行く行為は、単に当時の風俗としてあったからと等閑に付すわけにはいくまい。物語の世界に取り入れられると、それは作中人物の個人的な一行動という段階から一歩進んで、物語という構造物において独特な効用、意義を帯びるように思われる。

したがって、拙論では、作品に見られる「略奪婚」の例をあげ、作品に与える効果を考えて、物語文学における求婚のバリエーションという側面から、その「物語素」としての重要性と創意性を探っていきたい。

## 二、求婚変奏曲の現象と「垣間見」

「略奪婚」という「物語素」を平安時代の物語文学に限って例を挙げてみるならば、次のようになる。『竹取物語』における帝のかぐや姫を「率ておはしまさむ」[9]とする略奪行為、『伊勢物語』第六段[10]、

> むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きにきけり。

[8] 注 5 に同じ。p.80
[9] 注 1 に同じ。p.64
[10] 渡辺実　校注『伊勢物語』（新潮日本古典集成 2、新潮社、1976.10）p.18（下線は筆者）

と、十二段[11]、

むかし、男ありけり。人のむすめを盗みて、武蔵野へ率てゆくほどに、盗人なりければ、国の守にからめられにけり。

と、二話とも男が女を盗み出して逃走する物語、『大和物語』一五四段「龍田川」[12]、

大和の国なりける人のむすめ、いと清らにてありけるを、京より来たりける男のかいまみて見けるに、いとをかしげなりければ、盗みてかき抱きて馬にうちのせて逃げていにけり。

と、一五五段「安積山（あさかやま）」[13]、

むかし、大納言の、むすめいとうつくしうてもちたまうたりけるを、帝に奉らむとてかしづきたまひけるを、殿に近う仕うまつりける内舎人にてありける人、いかでか見けむ、このむすめを見てけり。（略）さる心まうけして、ゆくりもなくかき抱きて、馬に乗せて、陸奥の国へ、夜ともいはず、昼ともいはず、逃げていにけり。

との二話の二人の姫君はともに悲観して死んでしまう悲劇的説話、『宇津保物語』「藤原の君」[14]巻、

博打、京童べ、数知らず集まりて、一の車を奪ひ取る。殿の人々から騒ぎすれば、車の簾かかげてのたまふ。「奪ひ得つ。これやこの、惜しみたまふ御娘。なめき罪ぞ謀らるる。疎かなる罪ぞれうぜらるる。双六のぬしたち」といひて、

と、上野の宮が暴力による偽あて宮を略奪するエピソード、『落窪物語』における道頼が継母に虐められている落窪の君を救出する劇的行動、『源氏物語』「若紫」に光源氏が少女紫の上を発見して盗むようにして連れ帰った少女誘拐事件、『浜松中納言物語』では、好色の式部卿宮が吉野の姫君を清水寺から盗み出す失踪事件、『狭衣物語』

[11] 注 10 に同じ。p.25（下線は筆者）
[12] 片桐洋一 （他）校注・訳「大和物語」（『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』日本古典文学全集８、小学館 1985.9 第 16 版）p.402（下線は筆者）
[13] 注 12 に同じ。p.403（下線は筆者）
[14] 中野幸一／校注・訳『うつほ物語（１）』（新編日本古典文学全集 14、小学館、1999.5）原文：p.161（下線は筆者）

巻一に狭衣は仁和寺の威儀師に盗まれた飛鳥井（あすかい）の女君を救った話、『堤中納言物語』「花桜折る少将」巻に少将が老いた尼君を姫君と間違えて盗んだおかしな話など、いずれも男性が女性の身体の自由を奪う話である。

紙幅のため、一々話を取り上げて詳しく説明することができないが、略奪婚を取り扱っている視点、及び各物語に「女を盗む」がえがかれている内容を、横断して捕えようとするならば、立石和弘の『男が女を盗む話―紫の上は「幸せ」だったのか』[15]を参考すべきである。

男性が女性の身体の自由を奪う話は『源氏物語』における光源氏と藤壺及び柏木と女三宮との密通事件などと違って、女性の性の自主権を侵すほか、行動力のない女性の身体をも奪い去る求婚の変奏曲と言えよう。その非常手段の動詞をまとめると、『古事記』（大国主神）と『更科日記』（竹芝寺縁起譚）の「負（背負う）」表現以外、物語文学では、「率ておはす（連れて行く）」、「盗む」、「かき抱きて馬に乗せる」、「かき抱きて車に乗せる」、「奪ひ取る」、「率て隠す」、「盗みて、率ておはす」など、その表現は多様である。盗む身体的行為の「負う／負われる」「抱く／抱かれる」の意味合いについて、小谷雅司は「男が女を盗む物語―身体・イデオロギー・通過儀礼―」[16]で次のように解釈している。

> 「抱く」行為は、女の抵抗があろうとも、男の力によって女を「抱く」ことができ、男の視線による「監視」が可能である。男女の視線は互いに向かい合い、対立する。しかし、「負う」

---

[15] 立石和弘『男が女を盗む話―紫の上は「幸せ」だったのか 』[15]（中公新書、中央公論新社、2008.09）
本書では、平安時代の物語文学における「男が女を盗む話」をたどることによって、次の二点について考えてみたいと思う。ひとつは、正式な手続きを踏まない男女の婚姻を通して、物語は何を語ろうとしているのかという問題。つまりは、「男が女を盗む話」の内容についての分析である。いまひとつは、「男が女を盗む話」がどのように叙述されているかという、語り方の問題である。（「はじめに」 p.ⅲ）

[16] 小谷雅司「男が女を盗む物語―身体・イデオロギー・通過儀礼―」（『国語国文学研究』46、熊本大学　文学部国語国文学会、2011.2）p.21 下（下線は筆者）

行為は、男の一方的な力だけでは女を背負えず、女が男の背中に身を落ち着ける必要がある。男が女を「負ふ」ためには、女の意思（＝同意）が必要であり、それがなければ背負うことはできない。「負ふ／負はれる」行為は、男と女の共同行為であり、男女の視線は共に対立することなく、同じ方向（＝目的地）に向かう。

つまり『古事記』（大国主神）と『更科日記』（竹芝寺縁起譚）における「負ふ／負はれる」表現から女の意思が（＝同意）あるとうかがわれるが、この二話は神話と古伝承に属している時代背景と女性側の自らの意思に基づいた行動から考えると、略奪婚とは言えなくなり、駆け落ち婚に近いと思われる。物語文学における「略奪婚」は、女性の意思を考慮せずに男性が強制的に女性を移動させるという行動によって行われる。これをその行動の成否に着目して分類[17]してみると、以下の四つに分けることができる。すなわち、

（一）男が女の身体を奪おうとするが、失敗するもの。

『竹取物語』『狭衣物語』

（二）男が女の身体を奪うが、最終的には失敗するもの。

『伊勢物語』『大和物語』

（三）男が女の身体を奪い、成功を収めるもの。

『落窪物語』『源氏物語』『浜松中納言物語』

（四）男が女の身体を奪うことには成功するが、偽者であるもの。

『宇津保物語』『堤中納言物語』

となる。この四つの分類にあげられた作品を見れば、平安時代の物語文学のほとんどが網羅されていることが分かるだろう。

一方、当時の社会では、貴族の女性たちはみだりに人前に姿を曝すことがないため、男たちは世間の噂で美しい女と判断したり、女

[17] 注 16 に同じ。参考のため、小谷雅司の分類を掲げておく。
「盗む物語」は〈権力〉という観点から見た場合、大きく二つのパターンに分けられる。〈男が高貴な女を盗む物語〉と〈高貴な男が女を盗む物語〉である。この場合の「高貴な」とは、その人物の背景にある血統や家柄、またそのときの政治的状況を含む。（こららを総合的に〈権力〉と表記する）、男と女との相対的な関係によって規定される。p.24 下

性の楽器弾奏やその筆跡に心惹かれたりして恋慕するようになるのが普通であった。しかし、稀にない物陰から垣間見をしたり、偶然相まみえることがある。そうした場合、男性は恋情を強烈に掻き立てられ、物語は「語り手」側と「見る」側と「見られる」側の三重構造に分かれて、スリルに富んだ展開を見せることになる。物語における垣間見について今井源衛は次のように述べている[18]。

> かいま見は「かいま見る者」と「かいま見られる者」との両者から成立つ行為であり、しかも作品に現われる場合には、読者はその文章を通して、一方には「見る者」の目を借りて「見られる者」の容姿を眺めつつ、他方では作者の解説によって、直接「見る者」の動きと心理とを知り得るのである。すなわち素材としてのかいま見の興味は、これを分析すれば「見る者」を見る興味と「見られる者」を見る興味との二面から成ってゐると考へられる。

つまり、垣間見は「物語展開の要ともなる重要なシチュエーションであり、見る男と見られる女とは、その後必ず何らかの関係を紡いでいくのが常套であり」[19]、また「秩序化された世界に亀裂を入れ、大胆に物語を展開させる装置として、垣間見というモチーフが繰り返し利用されている」[20]と、物語構成上に効果的に用いられていることが理解されよう。

したがって、物語文学の中で男性に女性を盗み出すという非常手段を取るのは、相手に相まみえる、あるいは「垣間見」ることが前提条件となっていると言うことができる。

---

[18] 今井源衛「物語構成上の一手法」（『王朝文学の研究』1970.10、角川書店）p.34
初出：今井源衛「古代小説創作上の一手法－垣間見について－」（『国語と国文学』第 25 巻 3 号、1948.3）pp.28 下-29 上

[19] 立石和弘著『男が女を盗む話―紫の上は「幸せ」だったのか』（中公新書 1965、2008.9、中央公論新社）p.76

[20] 注 19 に同じ。p.76

## 三、求婚変奏曲の生成背景

物語に「略（掠）奪婚」を取り入れる契機、効果、意識ないし手法などを論述する前に、上述したそれぞれの物語に描かれている女性の身体の自由を奪うエピソードが発生した平安時代の社会背景を把握しておきたいと思う。

まず、「物語の祖」の『竹取物語』に描かれているかぐや姫の成人式と命名式の場面を見てみよう。

> この児、養ふほどに、すくすくと大きになりまさる。三月ばかりになるほどに、よき程なる人になりぬれば、髪上げなど左右して、髪上げさせ、裳着す。帳の内よりも出ださず、いつき養ふ。（中略）翁、竹を取ること久しくなりぬ。勢ひ猛の者になりにけり。この子いと大きになりぬれば、名を、御室戸斎部の秋田を呼びて、つけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつ。このほど三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきらはず呼び集へて、いとかしこくあそぶ。[21]

以上の内容から分るように、平安貴族や財力家の姫様は成人した後、ほとんど「帳の内よりも出ださず、いつき養」われて、身の自由が家庭の奥に拘束され受身的に男性に求婚されるのである。男性の求婚の行動や手段としては「闇の夜に出でても穴をくじり、垣間見」[22]をしたり、恋文や嘆きの和歌を書いたりして、女性に接近しようとしている。また、教養のある貴族の男性の場合、『竹取物語』における五人の「色好み」の貴公子のように「あるは笛を吹き、あるは歌をうたひ、あるは唱歌をし、あるはうそぶき、扇鳴らしなど」[23]をするのは当時一般の紳士君子が共通している求婚マナーである。要するに平安貴族の男性は能動的に受動的な女性に求愛の行動や発信を出すことができるが、女性側は家の外へ自由に出られないので、特定でも、なくてもいい男性のそれを受ける一方である。だから、

---

[21] 注 1 に同じ。p.10（下線は筆者）
[22] 注 1 に同じ。p.11
[23] 注 1 に同じ。p.17

平安時代に入ってから、男女の間にはすでに前時代の『万葉集』巻一巻頭歌[24]、

籠もよ み籠持ち ふくしもよ みぶくし持ち この岳に 菜摘ます児 家聞かん 名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居れ しきなべて 吾こそ座せ われこそは 告らめ 家をも名をも」

（歌意：籠もまあよい籠をもち、ふぐしもまあよいふぐしを持って、この岡に菜をつまれている、娘子よ、家がどこにあるか聞きたい、名を言って下さい。大和の国はすべて私が治めている。広くゆきわたって私が治めている。私こそ家をも名のるから、娘子も家をも名をも言って）

と、のように、雄略天皇は野原で菜を摘む村の娘に求婚の意を含んだ歌を読みかけたような原始的、直截的な「妻覓ぎ」や「妻問ひ」（当時、家や名を教えることは求婚を承諾する意味合いがあったから）の触れ合いの場が閉じられた。男女の交通手段は直対面の話し合いや見合いでなくなり、文字（手紙、和歌）や音声（音楽や吟唱）などの間接的な手段しか取れないのである。

いずれにしても、貴族社会の男女の間には、かなりの距離の隔たりがあり、求める女性を手に入れるためには、さまざまな方法を講じなければならない。その家族の許しや世話役の女房の協力を得ない限り、恋愛がなかなか成り立たないのである。しかし、そういった障害こそが、物語の展開力となり、読者の興味を惹きつけるのである。換言すれば、男女間の恋愛における常識的、道徳的手順からの逸脱こそが、物語作家が創造力を発揮するポイントと言うことができるだろう。その好例としての『伊勢物語』第六段の「芥川」は略奪婚の話型の範疇に属しているのであろう。つまり、周知のように『伊勢物語』第三段から第五段までのストリーは、後人注を参考しつつ読めば、業平と二条の后になる前の藤原長良の娘の高子との恋愛譚だと鑑賞できる。ただし、ある男（業平）は、藤原一族が大

[24] 久松潜一『万葉秀歌（一）』（講談社学術文庫 2、講談社、1976.6）pp.50-51

事に育った娘を使って皇室との関係を深めてゆく政略を知らず高子と恋し続けるが、「女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、かろうじて盗みいでて、いと暗きにきけり（第六段）」[25]と氏族の許しが得られないので結婚の望みをはかなみ、ついに盗むという非常手段にまで訴えた。また女性の身体を、見たことに駆使させられたあげく、強制的に獲得しようとする略奪婚の素材を物語文学に導入したのは『竹取物語』が最初である。

かぐや姫の美貌を耳にして、すぐ「多くの人の身をいたづらになして婚はさんなるかぐや姫は、いかばかりの女ぞと、まかりて、見て参れ」[26]と、特使を派遣した。しかしかぐや姫は面会を拒絶して特使を帰した。それにしても国王である帝は諦めず直接竹取翁の家へかぐや姫を見に行くことを決行した。

> かぐや姫の家に入り給ふに、光満ちて、けうらにて居たる人あり。「これなむ」と思して、逃げて入る袖をとらへ給へば、面をふたぎてさぶらへど、初めよく御覧じつれば、類なくめでたく覚えさせ給ひて、「ゆるさじとす」とて、率ておはしまさむとするに、かぐや姫、答へて奏す、「おのが身は、この国に生れて侍らばこそつかひ給はめ、いと率ておはしがたくや侍らむ」と奏す。帝、「などか、さあらむ。なほ率ておはしまさむ」とて、御輿を寄せ給ふに、このかぐや姫、きと影になりぬ。「はかなく口惜し」と思して、「げにただ人にはあらざりけり」と思して、「さらば、御供には率て行かじ。もとの御かたちとなり給ひね。それを見てだに帰りなむ」と仰せらるれば、かぐや姫、もとのかたちになりぬ。[27]

「よく御覧じつれば」、「率ておはしまさむ」、「おのが身」、「御かたち」などの描写から分かるように、「見」られた「身」と「見」た「身」をめぐる物語的効果が見られる。かぐや姫の身体が「影」に

[25] 注 10 に同じ。
[26] 注 1 に同じ。p.58（下線は筆者）
[27] 注 1 に同じ。pp.64-65（下線は筆者）

なったからこそ自分自身の自由を守ったので、物語はかぐや姫の物語そのまま求婚の変奏曲として月への「昇天譚」になられていくのである。

もちろん、直接見ることと垣間見ることでは、若干の違いがある。『竹取物語』では、かぐや姫は帝の目に直接に見られているが、その緊張度は「垣間見」より高いと言ってよい。男性は口按摩のような口説きを弄する余裕もなく、女性の抵抗も効き目はあるまい。これに対して、「垣間見」の場合、「見る」側の男性は恋情を強烈に引き起こすが、「見られる」側は何も知るはずがない。それゆえ、連れ去られる女性はほとんど事情が分からないまま攫われることになる。したがって、「垣間見」は今井源衛が述べた「物語構成上の一手法」になるかもしれないが、女性へ接近して行動しなければ、女性を攫いださなければ、『竹取物語』[28]の、

> 世界の男、貴なるも賤しきも、このかぐや姫を、得てしがな、見てしがなと、音に聞きめでて惑ふ。そのあたりの垣にも、家の門にも、をる人だにたはやすく見るまじきものを、夜は安く寝も寝ず、闇の夜に出でても穴をくじり、垣間見、惑ひあへり。

と、かぐや姫を手に入れたい、妻にしたいと思って夢中に物の隙間からこっそりのぞきこむことに止まり、プロットの展開上には「よばひ」という語源説の興味をしか起こさない。

ともあれ、いずれにせよ、男性が女性を見初めてから、女性と接触し、女性を攫うに至るまでの緊張感、創意性が、恋愛物語の成否を決める最も重要な要素と言っても過言ではない。「変化の人」のかぐや姫の場合、帝に拉致されずに身体の自由は守られ、物語のプロット展開は相聞譚からかぐや姫中心の昇天譚へと移行し、終焉を迎える。だが、もし、かぐや姫が天人でなかったら、帝のかぐや姫を「率ておはしまさむ」とする略奪行為は、違った展開と結末を迎えていただろう。そのような意味で作家的想像力を刺激するという点において、平安朝後期の『堤中納言物語』にまで波及した「物語素」

[28] 注 1 に同じ。p.11（下線は筆者）

としての略奪婚譚は、『竹取物語』の特質としてさらに注目されてよかろう。

## 四、『源氏物語』における略奪婚

『竹取物語』の略奪婚は企図されながらも、結局失敗に終わるが、「色好み」の風習、一夫多妻の婚姻観の下に、受動的、静態的な立場に置かれた平安朝貴族の女性は、身体の自由を常に脅かされている。そのような男女関係を主要なテーマとして結実したのが、『源氏物語』の光源氏の恋愛遍歴ではなかろうか。光源氏は、夕顔・空蝉・末摘花・朧月夜・六条御息所・紫の上・軒端の萩・葵の上・花散里・藤壺・明石の君・女三の宮などの女性とさまざまな恋を味わうが、その内実はかならずしも相思相愛ではない。単に男性の視点から見れば、その幾多の恋の遍歴は華やかに明るく楽しい、若い命の喜びの色彩が濃厚である。青年光源氏の特色をまとめた今井源衛は『源氏物語への招待』の中で次のように述べている[29]。

> 一定の型に収まらず規矩準縄で律し得ない純粋で自由な人間性を根底に、教養・知性・愛情などすべてを具えた理想人ということになるのであろうか。それは理想と言っても、決して市井道徳の上の聖人君子じみたものではなく、男の肉体と欲望とがなまぐさく匂う血の通う人間である。だからまた彼は、時につかみどころのない矛盾した存在に見え、そこにかえって測りがたい人間性の真実を物語るものがある。

しかし、男性の理想像を強調する一方、女性側にとってはむしろ相互の愛情と納得を前提とする情交ではないと言えよう。『源氏物語』における「情交の描写」に関して今井源衛はあらためて次のように述べている[30]。

> 桐壺に続く第二巻、序のような「雨夜の品定め」が終わると突如として我々は、夏の一夜、それまで何の縁もなかった人妻

[29] 今井源衛『源氏物語への招待』（小学館 1992.4）p.34
[30] 注 29 に同じ。pp.134-135（下線は筆者）

> の空蝉に、強引に押し入る源氏の姿を見せ付けられる。源氏の口按摩がいかに巧みであったとしても、そのために女が彼を快く迎え入れた形跡はない。事が果たされたあとに、泣いている女をみて、「心苦しくはあれど、見ざらましかば口惜しからまし」と源氏が思ったというのは、彼が自らなかば加害者であることを自覚している証拠である。事男女の性の交わりのなかでは、この種の加害行為は一般の犯罪とは違って、女性の側からむしろそれを無意識裡にせよ待ち望む点があるものだとは、男の側からしばしば言われることだが、しかし、そのことを源氏の心理として多少は計算にいれるとしても、この夜の女の心理にそれを加えて考えることは無理だろう。源氏の行為が、いわゆる強姦に属することは明らかである。

また、今井源衛は『源氏物語』に現われる男女間の「情交の描写」についてさらに、「『源氏物語』のそれらの大半は実質的には紛れもない強姦」[31]であることを強調している。

強姦にせよあるいは事後の黙認（和姦と看做されがち）にせよ、女性は結婚する前に、もし相手の男性と特別な愛情関係を擁していなければ、いきなり闖入される場合、必ず強烈な恐怖を感じ、抵抗しないことはないだろう。性＝身体の自由を犯されたことや不倫不義の関係（光源氏と藤壺との関係）を結んだことは物語文学の中で法律上の犯罪行為として問われていないとは言え、事後男女それぞれの内心世界はすでに高波が生じたと思われる。今井源衛が指摘した結論から考えれば、色好みの男による通い婚や一夫多妻が一般的だった平安朝の社会の下では、恋愛や求婚は相思相愛によって協奏曲を奏でることが容易ではなかったようである。したがって、物語文学に描かれたラブストーリーは、ほとんど変奏曲によって幕を開き、それから各自の曲目の変化に伴って展開していく。むしろ、物語文学の恋愛譚や求婚譚においては、愛し合う二人の協奏曲によってハッピーエンドが導かれる物語を見つけ出すことの方が難しいだ

[31] 注 29 に同じ。p.134

ろう。そのような男女関係は脇役には与えられることはあっても、物語を主導するものとはなりにくい。物語作家は、聞き手や読み手が期待する、波乱に富んだストーリーをいかに紡ぎ出すかに創意を凝らさなければならないからである。そして、作者は発生しそうもないこと、発生する可能性の低いことを、「語る」＝「書く」力をもって、迫真性のある「出来事」として現出させる。『源氏物語』の作者紫式部が創作した光源氏の恋愛遍歴の物語は、まさにこれだろう。なかんずく、女性の身体を盗み出し、その自由を略奪した『源氏物語』の紫の上をめぐる少女誘拐事件はもっとも独創性に富んだ物語である。

光源氏は瘧病（わらはやみ）の療養のため、北山の聖を尋ねているある日、家来の惟光を連れて僧都の坊を垣間見に出かけた。最初に目にしたのは老いた尼君、女房たちと遊んでいる子どもたちであったが、突然一人の少女が走ってきた。「うつくしげなる容貌」[32]である少女が「雀の子を犬君が逃しつる。伏籠のうちにこめたりつるものを」[33]と残念そうに尼君に訴える様子を見た。さらに光源氏は垣間見の中で、

> つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かなと、目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似たてまつれるが、まもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。[34]

と、この少女が藤壺と似ていることに気づき、大いに惹かれたのである。光源氏は、その印象を、次のように思い出している。

---

[32] 石田穣二・清水好子 校注『源氏物語一』（新潮日本古典集成 1、新潮社、1976・6）p.189
[33] 注 32 に同じ。p.190
[34] 注 32 に同じ。p.190

さても、いとうつくしかりつる児かな、何人ならむ、かの人の御かわりに、明け暮れのなぐさめにも見ばやと思ふ心、深くつきぬ。[35]

このように、一度思う人に似ていると思い始めると、ますます心の緊張感が高まり、少女の保護者の祖母尼君の逝去、親不在の隙間と乳母少納言の暗黙の同意の接近などの条件を合わせて、ついに光源氏は、「君は何心もなく寝たまへるを、抱きおどろかし」[36]て、唖然とする若君づきの女房の前から「かき抱きて」[37]出てしまった。この一部始終は『竹取物語』の帝や『伊勢物語』第六段「芥川」のような、唐突に盗み出すものではなく、あらゆる手段を講じていろいろな交渉を試みた結果となったのである。それ故に紫式部の巧みな描写によって物語のその後の、紫の上が光源氏に最も愛された女性に創り上げた結果から逆算してみれば、この少女誘拐事件は美化されがち、略奪婚とは思われなくなるのであろう。

## 五、おわりに

紫の上少女誘拐事件を物語文学における略奪婚の集大成と見なして、拙稿をまとめてみれば、女性の身体の自由を奪い取る略奪婚の話型を物語に取り入れるのは、危険でもあり転機でもあると言える。なぜ危険であるかというと、かぐや姫が影になったり昇天してしまったりして身体が消えてしまう『竹取物語』、高貴な姫君が盗み出され鬼に一口で食われる『伊勢物語』六段、女性が悲惨な死に方をする『大和物語』一五四・一五五段など、略奪婚を取り入れた場合､ステレオタイプに悲劇的な結末へと向かいがちだからである。つまり、河添房江と小林正明とが「女を盗む」[38]という項目の話型で次のように指摘している。

---

[35] 注 32 に同じ。pp.192-193
[36] 注 32 に同じ。pp.233-234
[37] 注 32 に同じ。pp.234
[38] 河添房江・小林正明「女を盗む」（『別冊国文学　竹取物語伊勢物語必携』学燈社、1988）p.163 上～下

女を盗み出す話は、大きく括りとれば、掠奪婚の話型の範疇に属するのであろうが、婚姻の成立に重きはおかれず、むしろ恋の逃避行とその悲劇的な終幕に主眼があろう。（中略）社会の良俗に反する行為に出してしまった以上、男は都での官人の生活を放棄し、女をつれて化外の僻遠の地へと落ちのびるほかない。恋の逃避行は、都空間からの一時の逸脱にとどまらず、その秩序からのむざんな脱落を意味した。あげくに鄙（逃亡先）で捕縛されてしまうか、馴れない生活に耐えかねて絶命するなど、破局をむかえるパターンの謂がそれである。

だが、紫式部はこのような破局へと向かう話型の性質を逆手にとって、あえてこの略奪婚という話型を創作要素[39]として物語展開に導入し、紫の上少女誘拐事件を作り上げ、物語の世界を広げようと構想した。略奪婚の話型が孕む危険を逆に利用し、物語に新しさを付与していると言うことができるように思う。そしてそれができたのは、恋愛譚の変奏曲としての略奪婚が、ストーリーに緊張を与える物語素として広く取り入れられていたからに他ならない。

今井源衛が述べた「垣間見」は「物語構成上の一手法」かもしれないが、非常手段を講じ女性へ接近しなければ、多くの「密通」事件や略奪婚の話にはならない。無論、男性が女性と接触するまでの展開は、物語文学が読者の興味を引き起こす大きな要素であるが、男性が「垣間見」から、その女性の身体の自由を奪い、我が物にし

[39] 島内景二「第三章　話型事典・素材事典の試み」『源氏物語の話型学』（ぺりかん社、1989.07）
1.〈話型〉についても、〈素材〉と同様のことが言える。やや突飛かもしれないが、御伽草子『酒呑童子』と源氏物語第二部の柏木物語は、同一の話型から発生したものと考えられる。（「術語の部」原型）p.276
2.複数存在する素材をどのような順序で配列し、どのような展開を示すのかを前もって決定している遺伝子の如きものが話型なのだ。話型を典型的に提示するものが各民族の神話であることから、「神話類型」ともいう。話型の一致が伝播によるのか独立発生によるのか説明は両方可能だが、どちらでもかまわない。問題は、話型が実在するのかとか話型は誰が作ったのかとかいうことではなく、話型を設定することで作品が発生した瞬間の作者内面のドラマをどの程度追体験できるか、ということなのだ。また、作者の創作意欲が執筆という行為によってどの程度変質したか、行現に主題をどの程度まで封じ込めえたかということも明らかにできる。（「術語の部」話型）p.282

ようとする略奪婚もまた、物語に緊張感と刺激を与える要素として見逃すわけにはいかない。そして、その利用の仕方は、物語創作の展開と変容を考える上で、大事な要素になるのではなかろうか。求婚変奏曲としての略奪婚という話型は、一つの物語の展開を考える上でも、物語文学というジャンルの展開を追う上でも重要な意味を持っていると言うことができる。

**【参考文献】五十音順**

池田利夫校注・訳（2001.3）『浜松中納言物語』（新編日本古典文学全集 27）小学館

石田穣二・清水好子校注（1976.6）『源氏物語一』（新潮日本古典集成 1）新潮社

稲賀敬二校注（1977.6）『落窪物語』（新潮日本古典集成 14）新潮社

稲賀敬二校注・訳『堤中納言物語』（三谷栄一・稲賀敬二　校注・訳『落窪物語 堤中納言物語』（1992.2）日本古典文学全集 10、小学館、第 18 版）

犬養廉校注・訳「更級日記」（藤岡忠美（他）校注・訳（1980.8）『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』第 11 版、日本古典文学全集 18、小学館）

今井源衛（1948.3）「古代小説創作上の一手法－垣間見について－」『国語と国文学』第 25 巻 3 号

今井源衛（1970.10）「物語構成上の一手法」『王朝文学の研究』角川書店

今井源衛（1992.4）『源氏物語への招待』小学館

片桐洋一（他）校注・訳「大和物語」（『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（1985.9）第 16 版、日本古典文学全集 8、小学館）

川崎寿彦（1985.4）「物語素」『文芸用語の基礎知識 ‘85 四訂増補版』国文学解釈と鑑賞 4 月臨時増刊号、志文堂

河添房江・小林正明（1988）「女を盗む」『別冊国文学 竹取物語伊勢物語必携』学燈社

小谷雅司（2011.2）「男が女を盗む物語―身体・イデオロギー・通過儀礼―」『国語国文学研究』46、熊本大学 文学部国語国文学会
小町谷照彦・後藤祥子校注・訳（1999.10／2001.10）『狭衣物語(1)(2)』新編日本古典文学全集 29／30、小学館
島内景二（1989.07）「第三章 話型事典・素材事典の試み」『源氏物語の話型学』ぺりかん社
高橋亨（1985.9）「いろごのみ」『国文学 解釈と教材の研究』「古典文学のキーワード」第 30 巻 10 号・1985 年 9 月号、学燈社
高橋亨（1991.1）「物語歌」『国文学 解釈と教材の研究』「特集 物語―物語論の新しい〈課題〉集」第 35 巻 1 号・1991 年 1 月号、学燈社
立石和弘（2008.09）『男が女を盗む話―紫の上は「幸せ」だったのか』中公新書、中央公論新社
中野幸一校注・訳（1999.5）『うつほ物語（1）』新編日本古典文学全集 14、小学館
西村亨『新考 王朝恋詞の研究』1981.7 再版、桜楓社
西村亨（1985.7）「『いろごのみの』とは何か 折口名彙としての『いろごのみの』」（『日本の美学 特集―色』5、ぺりかん社）
野口元大校注（1979.5）『竹取物語』（新潮日本古典集成 26）新潮社
久松潜一（1976.6）『万葉秀歌（一）』（講談社学術文庫 2）講談社
山口佳紀・神野志隆光校注・訳（1997.6）『古事記』（新編日本古典文学全集 1）小学館
渡辺実校注（1976.10）『伊勢物語』（新潮日本古典集成 2）新潮社